

新刊紹介

アーネスト・マツケー著
龍山章眞譯

インダス文明

印度史前遺蹟の研究

アールヤ民族の印度への侵入は、現在の通説によれば、大體西紀前千五百年頃に行はれたと言はれ、これを以つて從來の印度學では、印度文明の黎明と見做して來た。ところが、最近二十年間に於ける印度考古學者の發掘調査の結果は、この定説を根本的に覆へして、はしなくも此處に新しい事實が明るみに出されるに至つた。それは、この所謂黎明期に先き立つこと千年以上、即ち大體西紀前三千年から二千五百年に至るまでの頃、印度の西北地方、インダス河流域の廣範な地域に、所謂「インダス文明」を築いた民族のあつたことである。この民族も亦、恐らく侵入者であつたと推察せられてゐるが、その原住地や侵入の經路等についての詳細なことは、今後の調査と研究と

に委ねられてゐる現状にある。

アーネスト・マツケーの原著に成る「インダス文明」(一九三五年ロンドン刊)は、この興味ある問題に就いての最も新しい撮要書である。原著者は、ジョン・マーシャル卿を隊長とするインダスの遺蹟の發掘に親しく從事した考古學者で、隊長に亞ぐ有力なる隊員であつたといふ。従つて、彼の筆に成る本書が充分に信頼し得る著述として、今ここに選ばれたことは寧ろ當然であらう。

本書は次の八章から成り、それに譯者の「まへがき」と、原著所載の文獻目錄と、譯書の索引とを附し、更に寫眞數十葉(十六頁)を挿入する。第一章「インダス文明」の下では、初めに發掘の經過とその狀態とを述べ、進んでその民族の興亡と年代とに就いて概説してゐる。これを總論とすれば、第二章以下第八章までは各論とも言ふべきで、(2)建築と石工術、(3)宗教、(4)衣服と裝身具、(5)銅と青銅・道具類、(6)技術と工藝、(7)習俗と娛樂、(8)年代と外國關係の七章に分けられてゐる。最後の第八章は、第一章において結

論された年代に關する、一層詳細な考證である。今、譯者の「まへがき」を頼りに、これらの各論に紹介せられてあるインダス文明の特質を簡単に窺ふならば、次の通りである。即ち、その建築は殆どすべて煉瓦造りの立派な建物であり、特にその浴場の立派なことで、排水設備の完備してゐたことが指摘せられてゐる。宗教については、確かなことは解らないが、多くの神々を禮拜し、特に動物や植物によつて神々が表象せられてゐた。シヴァ神の原型と看做さるべき神の彫刻も發見された。印符の上には、これらの神像等が、多く彫刻されてゐる。又性標の禮拜も行はれてゐたらしい。衣服は熱い土地であるから簡單であつたと推測されるが、しかし種々なる寶石類や裝身具は數多く出土されて居る。又彼等が使用した道具類も、銅・青銅の製品や石造のものが現はれて居り、陶器も彩色を施されたいろ／＼の形態のものがあつて、その技術は甚だ進んでゐる。これらによつて見れば、その文化は相當高度化されてゐたもので、恐らく彼等は、この國へ入る

研究室彙報

以前から、すでに或る程度に文明化されてゐたものと推測される。彼等の大部分は交易を主とした商人で、近國はもとより、西方のパピロン・エジプト方面、北方の中央アジア方面とも交易を行つてゐたと言はれる。

本書の譯者は、最近南方共榮圏の文化に關する勝れた研究成果を矢つぎばやに發表して、斯學界に於ける獨自の地歩を固めつつある。本書も亦その學績の一環として、學的にも高く評價されてよいであらう。それと同時に、啓蒙書・教養書として持つ意義も亦極めて大きい。譯文は平易を旨とし、原著書の意趣を傳へることに努力したと言ふ。挿入の寫眞は餘り鮮明だとは言ないが、しかし本書の理解を助けてゐるばかりでなく、却つて寫眞によつて讀書欲をそそられる所、その役目は充分に果してゐて呉れる。(晃文社刊、B6型、本文二九一頁、定價二圓七十錢)(舟)

○人文學第一研究室

◇國文學會

○新入會員歡迎會 十一月十日 於鑑屋

新入會員 石川涉、北畠弘、瀧本文隆、土室昂、福島國豐、日野貢、鷲山樹心以上七名

出席者 多屋、阪倉、清水、頼原教授を始め學生十四名

○例會 十二月十日 於十教室
妙玄寺義門について 多屋教授

○樋口功教授歡迎會 五月二十日於森永
専門部教授として新たに執任せられた樋口功氏を迎へて多屋、阪倉兩教授御出席の下に開催す

○輪讀會 四月より毎週土曜日十二時二十分より十三時まで

○講本 古板本「三部假名鈔」

多屋教授指導

○樋口功教授御逝去

御着任後僅か二箇月にして突然訃報に接し會員一同誠に哀悼の意に堪へず。

教授は五月三十日府立病院に入院せられ直ちに開腹手術を受けられたが經過よろしからず六月一日午後に至つて急逝せられた、同三日御葬儀には會員全部參列し學生代表(武田唯一君)弔辭を讀んだ。

○例會 六月二十四日 於第十一教室
第一回卒業生研究發表

良寛について 上宮賢了君

○例會 七月一日 於第十一教室
第二回卒業生研究發表

芭蕉に於ける風雅の誠 武田唯一君
枕草紙の美的情緒について

平塚孝英君
(谷彰一記)